

## 絵本の読み聞かせ時の演じ分けが 子どもの物語理解と物語の印象に与える影響<sup>†</sup>

松村 敦<sup>\*1</sup>・森 円花<sup>\*2</sup>・宇陀則彦<sup>\*1</sup>

筑波大学 図書館情報メディア系<sup>\*1</sup>・筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類<sup>\*2</sup>

絵本の読み聞かせを効果的に行うための読み方の1つとして、登場人物の演じ分けが子どもに与える影響について検討した。具体的には、物語理解と物語の印象の2つの側面における子どもへの影響を実験的に明らかにすることを目的とした。

5, 6歳児23名に対して、登場人物を大げさに演じ分けて読み聞かせる演じ分け群と演じ分けをしない統制群の2グループに分けて、物語理解度を測るテスト、物語の印象を聞く質問を行った。実験の結果、演じ分けによって物語理解には影響がなかった。ただし、登場人物の心情を問う項目については、統制群の方が高いという傾向が示された。また、物語の印象では、演じ分け群の方が印象が偏る傾向がみられた。

キーワード：絵本、読み聞かせ、演じ分け、物語理解、物語の印象

### 1. はじめに

絵本は子どもが初めて出会う本であり、読み聞かせはそのきっかけとなるものである。そのような読み聞かせの方法とその効果には大きな関心もたれ、研究が行われてきている。絵本の読み聞かせを効果的に行うには、絵本の読み聞かせ方が重要とされており(中村 1991)、よりよい読み聞かせ方を明らかにすることは重要な課題と考えられる。

絵本の読み聞かせ方には、発声、表現力といった表現方法に関するものと、持ち方、めくり方といった形式的なものがある。形式的なものは一定の合意があるが、表現方法に関しては様々な見解があり、読み聞かせを実践する人にとって困惑する状況である。たとえば、松岡(1987)によると、技巧をこらして読むことは、お話をそこなうことになることとされ、また、東京都立多

摩図書館(2012)でも「お話自体がおもしろいのですから、演じて読む必要はありません」と演じることに否定的な意見が述べられている。しかし一方で、「表情を豊かに読むこと」を読み聞かせのコツとして肯定的にとらえる意見(上条 2009)もある。

これに対して、読み聞かせの表現方法の子どもへの影響を実験的に検討した研究に中村(1992)がある。この研究では、質問紙調査によって作成された絵本の望ましい読み聞かせ条件のうち「読み方・語り聞かせ方」因子に含まれる6項目(発音が明瞭である/感情がこもっている/声に高低(抑揚)がある/言葉に区切りがある/適当な速さである/文章内容が分かりやすい)を用いて、望ましい読み聞かせと望ましくない読み聞かせの2種類の録音テープを作成し、実際に読み聞かせを行い物語理解に与える影響を検証している。その結果、望ましい読み聞かせの方が物語理解に良い影響を与えることが示されている。ただし、どの項目が影響を与えているかについては明らかになっていない。

そこで本研究では、読み聞かせ方の表現方法の違いのうち特に見解の相違がある演じ分けて読むことに着目する。演じ分けは中村(1992)の研究での「感情がこもっている」と「声に高低(抑揚)がある」に関係する要因である。その上で、演じ分けによって子どもにどのような影響があるかを実験的に検討することを目的とする。影響を受ける対象としては、中村(1992)が扱った物語理

2015年4月2日受理

<sup>†</sup> Atsushi MATSUMURA<sup>\*1</sup>, Madoka MORI<sup>\*2</sup> and Norihiko UDA<sup>\*1</sup>: Effects of the Reading Picture Books by Exaggerated Performance on Young Children's Story Comprehension and Impression of the Story

<sup>\*1</sup> Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba, 1-2 Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki, 305-8550 Japan

<sup>\*2</sup> College of Knowledge and Library Sciences, School of Informatics, University of Tsukuba, 1-2 Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki, 305-8550 Japan

解を取り上げ、また、演じ分けにより大きく変わると考えられる物語の印象をあわせて取り上げる。

## 2. 方法

### 2.1. 実験概要

実験参加者を演じ分けをした読み聞かせを聞かせるグループ（演じ分け群）と演じ分けをしない読み聞かせを聞かせるグループ（統制群）の2つのグループに分け、それぞれ読み聞かせを行った後に、物語の理解度を測るテストと物語の印象を問う質問を実施した。読み聞かせはあらかじめ録音しておいた2種類の音声を使った。

### 2.2. 実験参加者とグループ分け

実験参加者は5歳児と6歳児あわせて23名である。内訳は、茨城県内の保育所にて協力を得られた16名と個別募集に応募があった7名である。これらを、演じ分け群と統制群の2グループに分けた。各グループで言語コミュニケーション発達の違いが無いようにするためにLCスケール（大伴ら 2013）の「手ごたえ課題」を実施し、その結果を基準にグループ分けを行った。その結果、今回の実験参加者23名のうち、LCスケールの得点が低い4名を除外し、19名で分析を行った。分析対象となった2グループの人数とLCスケールの得点平均は、表1に示した。

実験期間は2014年12月8日から2014年12月14日であった。

### 2.3. 実験環境

実験は、協力を得られた保育所では付属のホールで、個別に応募のあった参加者は筑波大学附属図書館内の個室で実施した。いずれも、机の上にスピーカーを置き、その前に実験実施者が座り、さらに対面する形で実験参加者の幼児が座った。保育所では同時に4名ずつ実施した。この4名は全員同じ群であり、1つの音源から4つのスピーカーに同時に読み聞かせ音声を出力し、読み聞かせを行った。個別応募の参加者は、個室にて一人ずつ実施した。

### 2.4. 使用した絵本

絵本は長谷川摂子作・ふりやなな画の「めつきらもつきらどおんどん」（福音館書店）を使用した。この絵本は、対象年齢が3歳以上であり、実験参加者でも理解ができることに加えて、喜びや悲しみなどの感情がはっきりと表れていること、複数の登場人物が存在することから演じ分けが十分にでき、本実験に適していると考えられることから選択した。

表1 各群の人数、LCスケール得点平均、標準偏差

群	人数(女児)	得点平均(標準偏差)
演じ分け群	10(6)	9.40(0.49)
統制群	9(6)	9.33(0.47)

### 2.5. 読み聞かせの録音音声

今回の実験では、実験ごとに絵本の読み方に変化が生じることを避けるために、読み聞かせはあらかじめ録音したもので行うことにした。

読み聞かせの録音音声は演じ分けをした読み聞かせと演じ分けをしない読み聞かせの2種類の音声を第2著者が録音した。演じ分けをしない読み聞かせは、事前に公共図書館で読み聞かせを実践している図書館員を訪問し見本を見せてもらい、その図書館員の読み聞かせを忠実に再現するように作成した。この録音は、中村(1992)で使われた「読み方・語り聞かせ方」因子に含まれる6項目が適切に設定されたものと想定できる。これに対して、演じ分けをした読み聞かせは、以下の条件を満たすように読み、演じ分けをしない読み聞かせよりも大げさな印象を与えるような録音にした。

- A)登場人物それぞれで声の高さを大きく変えて読む
- B)絵本の最初から最後まで同じ登場人物の声は同じように読む
- C)喜怒哀楽が表現された場面で感情がはっきり分かるように読む
- D)歌や情景を表す擬音語などを表情豊かに読む

演じ分けをした場面は全17場面中、登場人物の台詞がある2場面と、登場人物の台詞があり喜怒哀楽が表現された4場面、歌を歌っている2場面の計8場面である。

### 2.6. 手続き

実験参加者を実験実施者と対面で椅子に座らせ、挨拶と簡単な会話をした後で録音音声による読み聞かせ、及び事後のテストと質問を行った。実験実施者は保育所では4名の大学生（女性）とした。あらかじめ絵本の持ち方、ページのめくり方を録音音声にあわせて練習し、音声以外の読み聞かせ方法に差が出ないように調整した。個別実施の際は、保育所で実施したうちの1名と第2著者の2名で分担して実施した。

### 2.7. 理解度テストと評価方法

物語の理解度を測る目的で作成したテストである。今井ら(1999)を参考に「全員で遊んだあと何をしましたか?」のように物語にでてくる事象について問う質問6項目と、「おもちゃを食べたとき、かんたくんはどう思いましたか?」のように登場人物の心情について問う質問

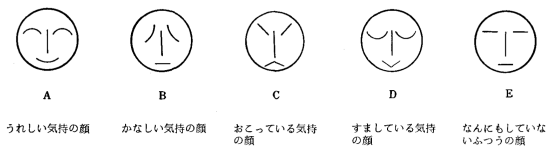


図1 心情項目の回答用表情図(今井・桶本 1973)

5項目の計11項目からなるテストを作成した。登場人物の心情について問う質問の際には、今井・桶本(1973)の実験で使用された表情図(図1)を用いた。理解度テストを始める前に表情図を一つずつ指差し、「これは嬉しいお顔ですね」というように5種類全てを確認し、実験参加者に表情図の意味を理解させておいた。心情を問う問題の際には、「このお顔の中から選んでください」と表情図の中から選ぶよう促した。実験参加者への回答に対する受け答えは、正答の場合には「そうだね」と言って確認し、誤答や無答の場合には、正答を教えた。

評価には、理解度テストにおける各項目ごとの適切な回答に対して2点、適切に言い表していないが、正答とみなしうる回答に対して1点、誤答および無答に0点を与えて集計した結果を用いた。質問項目は事象について問うもの6項目、心情について問うもの5項目の計11項目で、22点満点となる。

### 2.8. 印象質問と評価方法

印象質問では、演じ分けをした場合と演じ分けをしない場合で、物語の登場人物と場面に対する印象にどのような影響を及ぼすかを検証する。具体的な質問項目は、「ばけもの3人のうち、誰が一番嫌でしたか?」と「遊びはどれが一番おもしろかったですか?」の2項目である。

印象質問の結果の処理は次のように行った。登場人物の名前や遊びの名前を正確に回答できなかったとしても、登場人物や遊びを表していると思われる回答の場合にはそれぞれに分類した。「忘れた」「分からない」といった回答(統制群、演じ分け群それぞれに1名ずつ)は「その他」に分類し分析には用いなかった。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 物語理解への影響

表2、表3、表4に理解度テストの結果を示す。それぞれ、全体、事象項目のみ、心情項目のみについて、各群の平均点と標準偏差、人数を示したものである。それぞれに対して  $t$  検定を行った結果、全体では演じ分け群と統制群の理解度テストの平均点には有意な差はな

表2 理解度テストの結果(全体)

	演じ分け群	統制群
平均点	12.40	14.78
標準偏差	4.08	4.92
人数	10	9

表3 理解度テストの結果(事象項目)

	演じ分け群	統制群
平均点	8.20	8.11
標準偏差	2.09	3.11
人数	10	9

表4 理解度テストの結果(心情項目)

	演じ分け群	統制群
平均点	4.20	6.67
標準偏差	3.02	2.49
人数	10	9

かった(両側検定:  $t = 1.09$ ,  $df = 17$ ,  $p > .10$ ). ただし、Cohen の  $d$  を求め、水本・竹内(2008)を参考に解釈したところ  $d = -0.53$  と効果は中程度であった。事象項目についても両群の平均点に有意な差はなく(両側検定:  $t = 0.70$ ,  $df = 17$ ,  $p > .10$ ),  $d = 0.03$  と効果量も小さかった。一方、心情項目では両群の平均点の差に有意傾向があり(両側検定:  $t = 1.82$ ,  $df = 17$ ,  $p < .10$ ),  $d = -0.89$  と大きな効果も示した。

### 3.2. 物語の印象への影響

図2に印象質問の1問目「一番嫌なばけもの」の回答結果を割合で示した。演じ分けの印象への効果を見るため、Cramér の  $V$  を求め、水本・竹内(2008)を参考に解釈したところ  $V = 0.73$  であり、強い連関を示した。演じ分け群では「もんもんびやっこ」に偏り、統制群では嫌なばけものが「いない」に偏った。

図3に印象質問の2問目「一番面白かった遊び」の回答結果を割合で示した。同様に Cramér の  $V$  を求めたところ  $0.27$  であり、連関の強さは中程度であった。

### 3.3. 考察

理解度テストの結果から、理解度は演じ分けによって大きく変わることは無いことが示された(表2)。ただし、全体としては中程度の効果が見られていること、登場人物の心情を問う項目については、演じ分け群の方が低い傾向がみられ(表4)、効果量も大きいことを合わせて考えると、演じ分けが心情を察する働きを阻害している可能性があると考えられる。心情項目で特に点数の差が出た質問は、歌を歌った時の気持ちを問うもので、楽しそうな歌とその時の怒っている心情が結びつきにくくなったと思われる。演じることが心情を理解するの

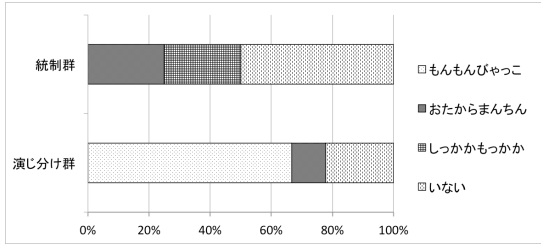


図2 印象質問1 「一番嫌なばけもの」の結果

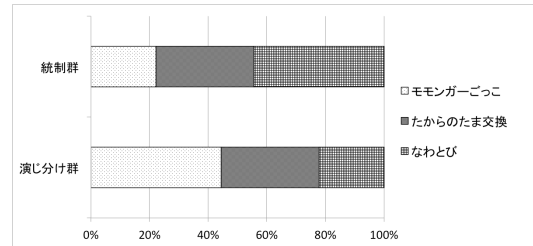


図3 印象質問2 「一番面白かった遊び」の結果

を妨げていた可能性がある。

印象質問の結果から、演じ分けるか否かと、一番嫌なばけものの選び方には強い連関が見られた(図2)。特に演じ分け群で多かった「もんもんびゃっこ」に対しては、演じ分けた声の不快感をもたらしたことが推測される。これに対して統制群では「いない」が多いことは自然な読み方が印象を左右しないことを示していると考えられる。一方、一番面白かった遊びの選択には中程度の連関があった(図3)。面白い遊びより嫌なばけものの印象に連関が強いのは、そもそも演じ分けが直接登場人物の印象に強く影響を与えると考えられるため、妥当な結果である。これらの結果は、演じ分けで物語の印象が変わる可能性を示唆している。

ただし、本研究の限界は、サンプル数の少なさから十分な精度を得られていないことである。また、演じ分けの程度や種類で結果が異なる可能性も十分ある。

#### 4. ま と め

本研究では、絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語への印象に与える影響について実験的に検討した。23名の幼児を対象とした読み聞かせ実験を行い分析した結果は次の通りである。

- 1) 演じ分けを行う読み聞かせをした群と演じ分けをしなかった群には物語理解度に有意な差はなかった。
- 2) ただし、登場人物の心情を問う項目の成績は、統制群の方が良い傾向がみられた。
- 3) 演じ分けを行う読み聞かせをした群は、特に登場人物に対する印象が偏った。

以上により、読み聞かせ時の演じ分けは、大きく物語理解には影響しないものの、心情理解を阻害する可能性、また、登場人物に対する印象に影響がある可能性が示唆された。

今後の課題は、より多くの実験参加者を得て精密な結果を示すことと、演じ分けの程度や種類を検討し、より客観的な指標の作成を目指すことである。

#### 謝 辞

実験に協力していただいた保育所および実験参加者の皆様に感謝致します。また、貴重なアドバイスを頂きました筑波大学図書館情報メディア系の鈴木佳苗准教授に感謝いたします。本研究は科学研究費補助金(研究課題番号: 25330382)の補助を受けています。

#### 付 記

本論文は、第二著者の森田花による2014年度筑波大学学士論文の内容を加筆修正したものである。

#### 参 考 文 献

- 今井靖親, 森田健宏, 杉山美加 (1999) 幼児の物語理解に及ぼす挿入質問の効果—絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—. 桜花学園大学研究紀要, 1:19-35
- 今井靖親, 桶本真也 (1973) 幼児の共感性に関する実験的研究. 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 22(1):185-193
- 上条晴夫 (2009) 子どもを本好きにする読書指導のネタ&コツ. 学事出版, 東京
- 松岡享子 (1987) えほんのせかい こどものせかい. 日本エディタースクール出版部, 東京
- 水本篤, 竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究, 31:57-66
- 中村年江 (1991) 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究—絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせ条件の検討—. 読書科学, 35(4):149-159
- 中村年江 (1992) 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究(II)—絵本の読み聞かせが幼児の物語理解に及ぼす影響—. 読書科学, 36(3):81-88
- 大伴潔, 林安紀子, 橋本創一, 池田一成, 菅野敦 (2013) LCスケール 言語・コミュニケーション発達スケール 増補版. 学苑社, 東京
- 東京都立多摩図書館 (2012) “読み聞かせABC”. 東京都立多摩図書館. <http://www.library.metro.tokyo.jp/Portals/0/j/pdf/yomikikaseABCweb.pdf>, (参照日 2015.04.01)

(Received April 2, 2015)